

【研究ノート】

ベトナムの初等教育課程にみる言語教育の特質 「ベトナム語」と「英語」で設定された目標を手がかりとして

びわこ学院大学 白銀 研五

はじめに

近年、経済協力開発機構が 2025 年の生徒の学習到達度調査でヨーロッパ言語共通参照枠組み (The Common European Framework of Reference、以下 CEFR と略) に対応した外国語の能力を調査項目の 1 つにすることを発表したように¹、複数言語を扱う能力は様々な分野で求められつつある。また、アジアの一部の地域では英語を教育課程から削除しようとするうごきがあるものの²、その多くが植民地化された経験をもつ東南アジア諸国では、アセアン憲章第 34 条で英語を共通語と定めていることに表れているように、社会の様々な分野で英語が用いられている。一方で、教育における言語の扱いをめぐることは国家統合の行く末を左右しかねないだけでなく、場合によっては民族独立の意識を喚起することさえある。したがって、どの言語を外国語として受容するのか、また既存の言語とどのように共存させていくのかという問題は教育に限らず、政治的な戦略という意味でも重要な問題であるといえる。

本稿は、こうした言語教育をめぐる問題や近年の動向を背景に据えながら、ベトナム社会主義共和国 (以下、ベトナムと略) に焦点をあてる。ベトナムでは、現行憲法第 5 条第 3 項によって人口の約 87% を占めるキン族が使うベトナム語が公用語とされている。しかし、ベトナムにおいてはベトナム語がつねに公用語とされてきたわけではない³。そもそもベトナム語の漢語は「国語」(quốc ngữ) と表記できるものの、このローマ字の正書法は十七世紀にフランス人宣教師が布教のために発明したものであり、十九世紀の仏領期に入るまで社会に普及することはなかった⁴。したがって、ベトナム語は字義どおりの「国語」であったわけではない。一方で、後述する英語は、南北統一以降に教育活動としては衰退したものの、1986年の刷新政策以降再び用いられるようになり、初等教育段階では2018年から必修教科に位置づけられた。このように、ベトナムの言語教育は、独特の過程を経て発展してきただけでなく、近年大きな変革を迫られている。しかし、ベトナムの言語教育については、識字教育や民族語、外国語の研究はあるものの、ベトナム語と外国語の視点からそのあり方を捉える研究は見られない。

こうしたことを背景に、本稿は初等教育の教科である「ベトナム語」について、2006 年普通教育課程⁵と 2018 年普通教育課程⁶の目標を分析対象としながら、2018 年普通教育課程の「英語」の目標との共通項を析出することでベトナムにおける言語教育の特質について考察することを目的とする。

本稿の構成は次のとおりである。第 1 節では、先行研究に依拠してベトナムにおける外国語の扱いの移り変わりを整理したうえで、普通教育課程の総則における目標および評価観点の考え方を確認する。第 2 節では 2006 年と 2018 年の普通教育課程における「ベトナム語」と、新たに設定された教科である「英語」の目標を分析する。これをふまえ、第 3 節では、ベトナムの言語教育の特質を考察する。

なお、少数民族の言語や方言の扱いは、言語教育における重要な問題であるものの、本稿では「英語」の必修化を軸とした分析に焦点をあてるため、これらは主たる分析対象にはしないこととする。

第1節 ベトナムにおける言語教育政策の展開

本節では、民族独立以降の言語教育政策を整理しつつ近年の普通教育課程が示す考え方を確認する。

ベトナムでは1945年以降に識字教育運動が展開され⁷、解放地区に限定されながらもベトナム語の教育は普及していった⁸。1954年のジュネーブ協定締結後は、ベトナム語をも凌ぐほどであったフランス語の地位は急落し、北部ではロシア語と中国語、とりわけ前者が重視された。一方、南部ではアメリカ軍の駐留を受けて、英語による教育が広がっていく。しかし、1975年の南部解放後は初等教育の教授言語はベトナム語、主な外国語はロシア語とされ、英語、フランス語のテキストなどは焼き捨てられるなどして、外国語の教育状況は大きく変化した。同時に、1970年代後半からは対中関係の悪化によって中国語も扱われなくなる。こうした状況の後、1986年の刷新政策以降、英語の教育が再び活性化した一方で、1991年のソビエト社会主義共和国連邦の崩壊後、ロシア語の地位は大きく低下した⁹。

1990年代以降は、英語の需要の高まりとともに、教育訓練省は外国語教育に力を入れるようになり、2003年には教育訓練省決定第50号によって「英語」が初等教育段階の選択教科として位置づけられるようになった。また、2008年には「2008年 - 2020年段階国民教育系統における外国語教授」に関する首相決定第1400号が発せられ、小学校3年生から必修教科としての外国語の履修が段階的に進められた¹⁰。さらに、2014年には教育訓練省通達第1号によってCEFRに対応した「ベトナム6段階外国語能力参照枠組み」が示され¹¹、2018年普通教育課程から評価に用いられるようになった。

外国語をめぐるこうした扱いの変化と併行して、近年、普通教育課程も変化してきている。2006年普通教育課程の総則では、目標として「道徳、知識、健康、審美および基本的な技能について児童生徒の全面的な発達」、主体性、創造性、「社会主義を支持するベトナム人の形成」、労働や祖国防衛への参加などが謳われていた。これらに基づく評価観点は知識、技能、態度であり、評価の方法は平常評価と定期評価が中心とされた。しかし、2018年普通教育課程では、目標や評価観点が一新され、とくに目標では「学んだ知識、技能を生活および生涯にわたる学習に役立てること」が盛り込まれた。併せて、職業選択や調和的な社会関係の創出、豊かな精神生活などの項目も加えられた。

以上から、ベトナムの言語教育は政治的な動乱のなかでその普及発展が図られるとともに、近年は経済発展を指向して英語が再び重視されるようになったといえる。また、こうした言語教育を含め普通教育課程では「役立てる」という実用性が強調されるようになった。次節では、これらの変化をふまえ、2006年と2018年普通教育課程における「ベトナム語」と「英語」の目標に焦点をあてて分析する。

第2節 普通教育課程で設定された「ベトナム語」と「英語」の目標

本節では、2006年と2018年の普通教育課程における「ベトナム語」の目標の変化を確認したうえで、2018年普通教育課程で示された「英語」の目標について精査していく。なお、「ベトナム語」はかつて「国文」と呼ばれていたが、自国を多民族国家とする認識に立ち1962年に「習読」、1981年に「ベトナム語」へと改称された¹²。また、2022年現在中等教育段階以上では「語文」と呼ばれている。

2006年普通教育課程の「ベトナム語」の目標は表1の3項目からなり、まず「読む、書く、聞く、話す」技能の習熟が求められた。また、「ベトナムおよび外国の文化と文学」の知識、「ベトナム語を愛する心」や「ベトナム社会主義共和国人としての人格の形成」に資する態度を培うことが目指された。一方で、2018年普通教育課程の「ベトナム語」の目標は表2のとおりa)とb)の2項目に整理された。

表1. 2006年普通教育課程初等教育段階の「ベトナム語」の目標

1. 児童が、同年齢の子どもとの環境において学習、交流するために、ベトナム語を使用する技能（読む、書く、聞く、話す）を形成、発達させる。 ベトナム語の教授をとおして、考える力を身につけさせる。
2. 児童にベトナム語に関する次の簡単な知識を身につけさせる。自然、社会、人間；ベトナムおよび外国の文化と文学。
3. ベトナム語を愛する心を培い、ベトナム語の明晰さ、豊かさを守る習慣を形成し、ベトナム社会主義共和国人としての人格の形成を促す。

表2. 2018年普通教育課程初等教育段階の「ベトナム語」の目標

a) 児童が、次に具体的に示した重要な本質を形成、発達させるようにする；自然、家族、祖国を愛する；人間に関する意識をもつ；美、善を愛し健やかな心をもつ；学習を志向し労働を好む；学習と生活において真面目で誠実である；自分自身、家族、社会や周囲の環境に対して責任感をもつ。
b) 児童が、次の一般的な能力を形成しはじめ、基本的な読む、書く、話す、聞く言語技能のすべての能力を発達させるようにする；文章を正確かつ流暢に読む；文章の内容や情報を正確に理解できる；他の文章を関連づけ、比較できる；文法をふまえて正確に書きとる；語句、段落、短い文（主に物語と描写文）を書くことができる；はっきりと発表できる；話し手の意見を理解することができる。 詩と小説を区別することができるとともに、詩を吟じ、小説を読む文学的能力を培う；芸術的文章の美しさを理解することができる；文学的な文章において表現された美、善を前にして、想像力と理解を示し、感動することができる。

表2の a) では、「自然、家族、祖国への愛」や「美、善への愛」「学習を志向し、労働を好む」といった徳目的項目が掲げられ、b) で設定された「読む、書く、話す、聞く」の技能より先んじていることがわかる。また、表1と表2で示された4技能に着目すれば「話す」が「聞く」よりも先に設定されるようになった。さらに、b) では、詩や小説についても、区別や理解する能力が重視された。したがって、基本的な技能や徳目に沿った姿勢に加え、芸術についても技能が重視されていることがわかる。

次に、表3の2018年普通教育課程初等教育段階の「英語」の目標を見ると、主として「聞く」と「話す」ことに焦点をあてた「簡単なコミュニケーション」を重視していることがわかる。

表3. 2018年普通教育課程初等教育段階の「英語」の目標

- 聞く、話す、読む、書くことを通じて、英語を使った簡単なコミュニケーションをとることができ、そのなかで、聞くことと話すことの技能を強化する。
- 英語に関する最小限の基本的知識は、発音、語彙、語法を含む。英語を通じて祖国、人間および世界における英語を話す国とその他の国の文化的基盤について理解する基礎をつくる。
- 英語を学ぶことに対する積極的態度を培う；わが民族の文化と言語を誇りとし、大切に尊重する。
- 英語を効果的に学習する方法を身につけるとともに、将来の外国語の学習に向けた基礎を培う。

表3のとおり、初等教育段階の「英語」では基本的に技能の習熟が求められるものの、「英語を通じて祖国、人間および世界」について、その「文化的基盤」を理解することが掲げられている。また、異文化理解を掲げてはいるものの「祖国」からはじまる自国の文化の強調や、「わが民族の文化と言語を

誇りとし、大切に尊重する」ことが強調されている。さらに、「英語」では前述のとおり「ベトナム6段階外国語能力参照枠組み」に基づき、初等教育修了時点でCEFRのA1に相当する1級が求められている。したがって、初等教育段階の「英語」の目標では、CEFRという規範に準じた基準のもとで、「聞く」と「話す」ことに軸足を置いた基礎的な技能の習得に焦点があてられると同時に、自文化をはじめとする「文化的基盤」の理解が求められているといえる。

こうした「ベトナム語」と「英語」の目標のあり方を考えたとき、次の2点を指摘することができるだろう。1つは、両教科の目標に見る道具的側面である。例えば、「ベトナム語」では、2006年普通教育課程で「考える力」や「簡単な知識」が掲げられていたが、2018年普通教育課程では「できる」という行動目標が設定され、言語の操作を通じて文章にある情報をとり出し、それを表現させる点が強調されるようになった。また、「英語」では、「コミュニケーション」の手段であることを前提として、言語の理解よりも実際にそれを使用することに力点が置かれている。もう1つは、2018年普通教育課程の「ベトナム語」の目標a)や「英語」の目標に見る文化的側面である。とりわけ、言語をとおして詩や小説に加え、「祖国、人間および世界」とのかかわりやその「文化的基盤」の理解が強調されている。

では、以上のように考えたとき、「ベトナム語」と「英語」の目標から、ベトナムの言語教育についてどのような特質が見えてくるのだろうか。次節では道具と文化という視点から考察を進める。

第3節 道具と文化の視点で見たベトナムの言語教育

はじめにでも述べた経済協力開発機構の指針に表れるように、近年の言語教育の動向をふまえたとき、言語を「役立てる」ものとして捉える考え方は今後ますます重視されるだろう。しかし、前節で論じたように、こうした考え方は言語の1つの側面に過ぎない。一方で、文化について考えると、前節までに見たように、ベトナムでは時の情勢によって重視する言語が変わりながら言語教育で何が重視されるのかも変化してきた。これをふまえれば、道具と文化の視点は相互に影響し合う関係にあると考えられる。

また、2018年普通教育課程総則の目標では「役立てる」という考え方が示され、「ベトナム語」の目標では「聞く」ことよりも「話す」ことが重視されるようになった。教育において言語を「役立てる」ものとして捉えようとする考え方は理解できるものの、はたして言語教育の目標は可視化できる技能や徳目的な要素のみに帰せられるものなのだろうか。このように考えたとき、上記の道具と文化が相互に影響し合う考え方に立ち、「役立てる」言語観とは異なる観点を検討していく必要があるといえる。

この点に関連して村上(2008)は、日本の方言をめぐる論争から次の4つの言語観を導き出し、ベトナムの言語教育との比較考察に用いている。すなわち、①「正しい国語」を指向した国民形成の言語観、②合理化を指向し標準化された言語を求める「言語＝道具」観、③地域に根ざした文化的創造としての「言語＝文化」観、④生活上の言語が生活する人々の認識を形成する「言語＝生活認識の土壌」観である。このように村上(2008)は、「正しい」言語や「役立てる」言語を相対化し、固有の文化に内在する言語や言語そのものが日常的なものの考え方をかたちづくる視点を提示している。

上記③と④について附言すれば、村上(2008)は、「言語＝文化」観は、方言や民族語を本質や正統性をもつものとして捉える点で非正統性をつくり出し、言語の異なるあり方を排斥していく危険性を孕むものであるとする。一方で、「言語＝生活認識の土壌」観は、「たえず他者の言語との対話・混淆にひらかれ、クレオール化への指向を孕んでいる」という¹³。したがって、④は、誤用とされる表現を含め

て異なる用いられ方をつねに受容するため、こうした観点に依拠した言語が逸脱したものとして捉えられる傾向がある。一方で、③が本質主義に陥り、他の表現を排斥することを回避するための拠り所になるとする。村上（2008）のこうした言語観に立ってベトナムの言語教育に見る道具的側面と文化的側面を考えるならば、合理的な基準に基づき標準化された言語を指向することは、ベトナムの文化や諸外国の「文化的基盤」を単一的な認識で枠づけてしまうことにつながるといえるのではないだろうか。

さらに、「言語＝生活認識の土壌」観に立ったとき、たとえ民族語を選択教科として設定したり、発音や表現の多様さを教育内容に含めたとしても、標準化された技能をもとに「役立つ」言語を求める状況は、言語そのものが国家によって規定されていることを示していると考えられる。前述したように、これまでベトナムでは政治的な動乱によって言語教育のあり方は揺れ動いてきた。1990年代以降の経済発展によって社会状況は比較的安定してきたものの、標準化された技能を強く求める方針は、国家の政策が生活のなかの多様なことばを従来とは異なるかたちで規制し続けることを意味し、ことばが培ってきた生活における認識の幅を狭めてしまうことにつながるといえるのではないだろうか。

なお、初等教育段階の言語教育として規範にしたがって教育をおこなうことは必要であるし、目標が整理されて統一的な基準に基づいていることも重要であろう。また、言語の多様性は上級学校に進学してから学べばよいとする考え方もあるかもしれない。しかし、「国語」ではなく、多民族国家として「ベトナム語」を教科としていることと、初等教育段階では言語の基礎を重視することとを重ね合わせて考えるならば、多様な生活をかたちづくるはずの言語の豊かさが顧みられず、主要民族の「正しい」言語の技能習得が求められ、CEFRという外的規範に対して互換可能な技能が重視される状況と、自国を含めた多様な「文化的基盤」の理解を求める方針とのあいだにはずれがあるといえるだろう。したがって、ベトナムの言語教育には、道具的側面を重視しつつ、自他の文化を尊重する整理された目標を立てられる一方で、その内実はベトナムが独自に育んできた豊かな言語観を縮減させ、多様であるはずの文化を捉える認識枠組みを単一的なものさせてしまう、理念と実際のねじれた関係があるといえる。

おわりに

本稿は、2006年と2018年普通教育課程における「ベトナム語」と「英語」の目標を手がかりとして、ベトナムの言語教育の特質を探ってきた。第1節では、ベトナムの言語教育の変遷を整理し、政治的要因によってそのあり方が移り変わるとともに、外国語については経済発展を背景にして再び英語が重視される状況になったことを示した。第2節では、2006年と2018年の普通教育課程における「ベトナム語」と「英語」に焦点をあて、その目標に道具的側面と文化的側面があることを指摘した。これをふまえて第3節では、目標に見る標準化された単一的な言語の捉え方が、言語の多元的な解釈を制限し、生活における単一的な認識枠組みにつながるおそれがあることを指摘した。

以上の分析から、本稿の結論として導かれるベトナムの言語教育の特質は次のように表すことができるだろう。すなわち、ベトナムの「ベトナム語」と「英語」において標準化された単一的な言語観が隆盛となるなかで、ベトナムの言語がもつ文化的豊かさが縮減するおそれがあり、整理されたように見える目標には理念と実際のねじれた状況が表れている。但し、この問題は、教科のあり方やベトナムに留まるものではなく、グローバルに波及する教育改革が孕む本質的な問題と関連するものである。

なお、本稿はベトナムの言語教育について課題としての特質を指摘したが、今後は異なる視点から見

た特質も同様に探っていく必要があるだろう。とりわけ、政治的要因により言語教育が揺れ動いてきたベトナムは、時勢によって強かに自らの言語教育を維持、普及させてきた。このため、現行の言語教育の特質を固定的なものとして捉えるのではなく、今後の動向を含めより緻密に構成された時間軸で検討する必要がある。今後は、引き続きベトナムの言語教育に着目して、そのあり方を探っていききたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 20K13918 の助成を受けたものです。

注・引用文献

1. Organization for Economic Co-operation and Development. PISA 2025 Foreign Language Assessment. Retrieved December 19, 2021, from <https://www.oecd.org/pisa/foreign-language/>
2. Yuan, L. (2021, September 11th-12th). Rejecting English, China turns inward. *The New York Times International Edition*, pp.1,4.
3. Nguyen, X. N. C. M. & Nguyen, V. H. (2019). Language Education Policy in Vietnam. In A. Kirkpatrick & J. A. Liddicoat (eds.), *The Routledge International Handbook of Language Education Policy in Asia*. New York: Routledge, p.186.
4. 岩月純一 (2000) 「ベトナムにおける『近代的』漢文教育についての一考察—東アジアの視点から—」木村汎・グエン=ズイ=ズン・古田元夫編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』世界思想社、p.43.
5. Quyết Định của Bộ Giáo Dục và Đào Tạo, Số 16/2006/QĐ-BGDĐT, ngày 05 tháng 5 năm 2006 "Ban Hành Chương Trình Giáo Dục Phổ Thông."; Bộ Giáo Dục và Đào Tạo. (2009). *Chương Trình Giáo Dục Phổ Thông Cấp Tiểu Học*. TP.HCM: Nhà Xuất Bản Giáo Dục Việt Nam.
6. Bộ Giáo Dục và Đào Tạo. (2018, December 27). Bộ GD&ĐT công bố chương trình giáo dục phổ thông mới. Retrieved December 19, 2021, from <https://moet.gov.vn/tintuc/Pages/tin-hoat-dong-cua-bo.aspx?ItemID=5755>
7. 広木克行 (1977) 「ベトナム教育改革史」アジア・アフリカ研究所編『ベトナム 上 - 自然・歴史・文化 - 』水曜社、pp.157-160.
8. Nguyen & Nguyen, *op.cit.*, p.187.
9. *Ibid.*, pp.188-189.
10. なお、2021 - 2022 年度は第 2 学年の移行期間であり、第 3 学年のそれは 2022 - 2023 年度である。
11. 村上呂里 (2008) 『日本・ベトナム比較言語教育史—沖縄から多言語社会をのぞむ—』明石書店、p.303.
12. Thông Tư của Bộ Giáo Dục và Đào Tạo, Số 1/2014/TT-BGDĐT, ngày 24 tháng 1 năm 2014 "Ban Hành Khung năng lực ngoại 6 bậc dùng cho Việt Nam."
13. 村上、2008、前掲書、pp.412-414.

The Trait of Primary Language Education Curricula in Vietnam Focusing on the Aims of Vietnamese and English

Kengo SHIROGANE

As shown in the Common European Framework of Reference (CEFR), there is a trend of multilingualism in the educational arena. Language education is not only an educational matter but a political one because it could become a contributory factor to political convulsion. Vietnam has been swayed by political flux, and more recently by economic influence so that its language education has gone through significant changes. Based on the above, this study aims to explore the trait of Vietnamese primary language education that is now introducing English as a mandatory subject. To begin, this study traced the transition of Vietnamese language education where Chinese, French, Russian, and English were taught as foreign languages to clarify the frame of mind over language education. After that, it examined primary education curricula in 2006 and in 2018, focusing on the aims of Vietnamese and English. Findings are that an aspect of instrumentalism in Vietnamese becomes intense on one hand but Vietnamese as a subject advances national ideology on the other. As for English, it also contains cultural aspects meanwhile it refers to CEFR. Lastly, these findings are discussed in terms of instrumentalism and culture. As a result, because Vietnamese is regarded as dominant, there is a risk of reducing the cultural diversity, and for English to be construed by means of external canon, CEFR, it could distort Vietnam's culture. In conclusion, there is a torsion in the language education whose aims could paradoxically diminish the linguistic diversity and the external canon could contort Vietnam's culture. Yet, because Vietnam has a history of sustaining its own language and culture through social upheavals, a follow-up investigation on how Vietnamese language education develops is necessary in the future.